

教育実習生に望むこと

荒木高司

1 はじめに

私は、大学卒業後、一旦民間企業に勤務してから教員に転職した。自身の限られた経験だが、人の成長に関わりこれに立ち会える教員ほど素晴らしい仕事はないのではないかと考えている。

本日は教育実習への心構えについて話すが、優秀な教員になる学生は優秀な企業人にもなれるであろう。その意味で、教育実習を教員になるための実習とのみ捉えず、社会人として生きていく実習の場でもあると考えたい。この実習をきちんとこなせないようでは、教員以外の仕事も覚束ない。定められた条件下で一定の期日までに一定レベル以上の仕事を遂行できなければ、どんな職場も用意されていない。実習を充実した内容のものにできる学生なら、どこで何をやっても成功するということだと思う。

社会人になりたての頃に教えられたことは、その人の行動や思考に強く刻印される。私は就職当初、電話のとり方と電話での話し方、顧客への対応の仕方を厳しく言われた。今でもベルが鳴ると即座に受話器を取り、自分の所属と氏名を反射的に名乗る。敬語をはじめ言葉遣いも随分厳しく言われた。

人の一生とは、仕事・職業を通して社会に貢献することではないか。教員という仕事を目指すに当たっては、人間というものへの知的好奇心が十分あるのか、困難から逃げずにやり遂げる覚悟が果たしてあるのか、教員という仕事によって自分が社会に少しでも貢献できるのか、もう一度よく考えてみてほしい。

よく言われるが、子どもが好きだから教職を目指すというのでは不十分だと思う。大人は相手にできないが、子どもなら何とかできるだろうという気持ちで教員になる人もいるからだ。そういった逃げの姿勢が心の中に萌えていないか、よく考えてみてほしい。刻々と変化し時によっては手に負えないほど荒れる、そんな人間を相手にする仕事の難しさをもう一度よく考えてほしい。

2 礼儀とマナー

実習の際にまず問われるのが礼儀とマナーである。常識的なことを言うが外見は清潔にして清楚であってほしい。服装等は華美である必要はない。装飾品や化粧品も最低限で、なくても構わない。頭髪は乱雑で不潔でないことが大切だが、髪の毛が目にはかりしょっちゅう手で掻き上げるのは極めて見苦しい。職業人としてみっともないと悟るべきだ。

話し方や言葉遣いというのは、その人の頭の中がそのまま外に表れたものだ。きちんとした言葉遣いで話せるというのはきちんと考えられるということだから、ハキハキと明るく元気よく澁刺と話しができ行動できることが大切。

時間厳守はあらゆる仕事の基本。これができないとどんなチャンスも逃げて行ってしまう。日々、段取りを上手に組んで時間に沿って行動できるというところを見せてほしい。所定の時間より少し早めに取り掛かるのがポイント。仕事では関係者にその都度丁寧に連絡を取って進めるということができれば、チームや組織では相

手にしてもらえない。教員は専門職と言われるが、現在の学校は基本的にほとんど組織としてチームで動く。個人プレーだけに走ると支障をきたすので、その点も学んでほしい。

2005（H17）年の中教審の答申（「新しい時代の義務教育を創造する」）にもあるとおり、優れた教員の条件は、①教職への強い情熱、②専門家としての確かな力量、③総合的な人間力と言われている。迷ったらこの三つを思い出して行動すれば、私が話したことは当然導かれる。愛情、責任感、向上心、知識、指導力、常識、教養など、一人の社会人として必要な事柄ばかりだが、教員としては、さらにその一段上をいく気持ちを持ってほしい。

3 能力と資質

教育実習で直面するのが、自らに教員としての能力と資質があるのかということだろう。厳しい現実を突きつけられる人もいるが、目を逸らさずに正面から受け止めてほしい。判断のポイントは次の三つ。

第一に、教員の仕事の核心はやはり授業にあるということ。授業が思い通りにいかなくとも、教材研究などの準備も含めて授業が面白く楽しく、生徒の様々な反応を楽しむ気持ちがあり、「次はこうしてやろう」「もっと良くしてやろう」といった気持ちを持てるなら、この仕事への適性はあるのではないか。しかしながら実際は、「教えてみて初めて分かる理解の浅さ」かなということであろう。自分のそれまでの学習・学問が、いかに分かったつもりで過ぎなかったかということを思い知らされるのが教育実習という場である。自らの理解が十分深く広くなければ、それを伝える適切な言葉など全く出てこないということだ。

第二に、授業をはじめ教育活動は須らく生徒理解と生徒指導に帰着するということだ。対象は生きており刻々と変化し成長しつつある人間である。その日その時の精神も肉体の状況も様々である。そもそも学習する姿勢になっていない生徒も多い。その一人ひとりに目配りし声をかけながら集団をコントロールし導いていく。授業や教科外活動を進めていく。ひと際感受性の強い年代の子どもたちを、観察し理解してやりながら育てていくことがどれ程工夫を必要とし忍耐がいることかを知らなければ、その先にある成長という果実を味わうこともできない。

第三に、教員の仕事にはゴールがないということ。この程度で良いと思ったところがその教員のレベルになる。人を相手にし育てる仕事に十分やったという終わりはなく、自分自身を成長させ学ぶことに終着点はない。授業にはいつも不満が残る、やればやるほど改善すべき点ばかりが残る。自らに謙虚であり周囲の意見にも耳を傾け、「これでもか」と良いものを求め続ける職業である。一生学び続ける気持ちがなければ成長はすぐに止まる。その点、常に素直で柔軟であって、自分が一旦作り上げたものでももう一度壊してまたゼロから作り直すことを厭わない教員は、どこまでも伸びる。専門職とはそういう意味だ。加えて、根底には人間というものに対する深い洞察と強い好奇心があってほしい。人間とは愚かで馬鹿馬鹿しいことも行う生き物でありながら、その一方で崇高で高貴、愛すべき素晴らしくも面白い存在である。この両極の間を行き来するのが人間であり、その振り幅こそが人間の成長であり人生である。そこに、しかも一生のうち最も感受性が豊かな時期に関わることができるのが中学・高等学校の教員という職である。

4 自覚と準備

これまでの教育実習の際に出会った、少し困った実習生をパターン化して紹介する。自らを見つめる参考にしてほしい。

①足り内学（たりない まなぶ）君のケース

この学生は、実習授業を行う教科の学習について、理解が表面的であり知識が未整理である。自分ではある程度知識を備えていると思っているが、言葉を知っているだけで頭の中で知識はバラバラで相互に関係付けられていない。このため、指導内容に軽重や優劣を付け順序立てて授業を組み立てることができない。

また、授業の1単位時間（50分等）という枠組みという感覚もしっかりしていないため、時間内に何をど

の順にどこに重点を置いて進めるかが上手くできない。

〔対応策〕頭の中に学習指導案を構造的に描けるよう、普段から練習しておくこと。分かるということは繋がるということ。

②プライド高杉（ぶらいど たかすぎ）さんのケース

この学生は、失敗した経験が少なく、些細な躓きや周囲からの注意などに極度に傷つき落ち込んでしまう。さらに進んで、上手くできない自分自身を許せないだけでなく、原因は周囲や環境にもあると考え、周囲の指導助言にも素直に耳を貸せなくなってしまう。指導教員の変更まで求めた。

〔対応策〕日頃から大いに失敗しておく。挫折の経験、そこから立ち直った経験、苦しい状況を乗り越えた経験は人生最大の財産と考えるべし。

③ルーズ柴々（るーず しばしば）君のケース

この学生は、時間や決まりごとを守れず、いわゆる学生気分が抜けていない。社会人としての常識や組織との一員として働くという意識が希薄で、自分の都合を優先させる。1回ぐらいいは許されるだろう、手間はかけないが成果は得たいという甘さが捨てきれない。また板書も乱雑で汚く、生徒との距離感にも危うい面があり生徒とメールのやり取りをしてしまう。

〔対応策〕生活全般を振り返り、自分を厳しく見つめ直そう。まずは時間厳守から。

5 実習に臨む姿勢

教育実習は、実習校の善意により運営されていることを忘れない。教員は実習生を預かる期間大きな負担を負う。それでも引き受けるのは、将来教育の仕事を担当してくれる若者への期待感であり後継者を育成できる喜びがあるから。その意味で、実習とは教員という仕事のリレーの場である。そのために、教員は手間や面倒を厭わず実習生が日々力を付けていくのを見たいと努力する。

くれぐれもこうした気持ちに応え、素直に全力を尽くして失敗を恐れずにやってほしい。生徒にとっては先生、社会人として、そして教員に対しては学生として、東海大学生という看板を背負いながら、今日の若者の努力し挑戦する力の高さを大いに見せてきてほしい。

6 おわりに

ネイティブアメリカンの言葉に、「どんなことも7世代先まで考えて決めねばならない」という言葉がある。自らに続く世代への配慮と人間は常に謙虚に生きるべきことを強調した言葉である。

一人の人間が実感を持って考えることができるのはせいぜい3代までであろうか。知者とは、そうした範囲の彼方にいる人々のことまで思いを致し配慮しようとする人のことではないか。教育とは、そんな遥か彼方の人々にまで良きものを届けようとする仕事である。

大学でこれまで学んだ多くの智慧を教育実習に集約し、教育という地図に実習をしっかりと位置づけるべく臨んでほしい。